

うたとかたりの対人援助学

第21回 「2つの世界をつなぐコーダ」

鵜野 祐介

「ドライブ・マイ・カー」と手話語り

先日(2022年2月上旬)、濱口竜介監督「ドライブ・マイ・カー」を観に行った。まだご覧になっておられない方のために、あらすじを紹介することは差し控えるが、終盤近く、チャーホフの「ワーニャ伯父さん」が舞台上演される場面がある。この芝居の最後のシーンでソーニャ役の韓国女優が以下のようなセリフを手話(おそらく韓国手話)で語る。映画での台本と同じではないかもしれないが、ちくま文庫版(松下裕訳)『チャーホフ全集11』より引用する。

しかたがないわ、生きてかなければね!(間)

わたしたちは、ワーニャおじさん、生きて行きましょうよ。長い長い日々を、いつまでもつづく夜を生きて行きましょうよ。運命の試練にじっと耐えて行きましょうよ。いまも、年とってから、休むことなく人びとのために働きましょうよ。そして時が来たら、おとなしく死んで行きましょうね。あの世へ行ったら、苦しかったことを、涙を流したことを、苦い思いをしたことを申しあげましょうね、神さまはわたしたちをあわれんでくださるわ、わたしたちは、おじさん、明るい、すばらしい、うるわしい生活を見るのよ、わたしたちは心から喜んで、いまの不しあわせをなつかしく、ほほえましく振りかえるのよ、そうして休みましょうね。ほんとにわたしは、おじさん、心から、いちずにそう思ってるのよ……。 (ひざまずいて、おじの手に頭をのせながら、疲れきった声で) 休みましょうね!

娘と妻を亡くし、後悔の念にさいなまれながら日々

を送る主人公の演出家・俳優と、やはり突然に母親を災害で亡くした、彼の専属ドライバーを務める女性の心境が、ソーニャのこの長い独白に重ね合わされる。

何故このセリフが韓国手話で語られるのかは観てのお楽しみということにして、ここでは、韓国女優パク・ユリムの手話語り、他の何ものにも代えがたい輝きを放ち、観る者の心と身体に浸みわたる〈声〉を持っていたことを記すにとどめたい。

「コーダ あいのうた」と手話うた・身体うた

数日後、同じ映画館でシアン・ヘダー監督「コーダ あいのうた(原題 "CODA")」を観た。

舞台は米国マサチューセッツ州グロスター。父フランク、母ジャッキー、そして兄レオとの4人家族の中で唯一耳が聞こえる高校生のルビー・ロッシは、家族のために通訳となり、家業の漁業を手伝う日々を送っていた。新学期のある日、所属する合唱クラブの顧問ベルナルドは彼女の歌の才能に気づき、都会の名門音楽大学への受験を強く勧めるが、両親は家業の方が大事だと反対する――。

聞えない・聞こえにくい親を持つ子どものことを「コーダ(CODA: Children of Deaf Adult/s)」と呼ぶ。この映画の主人公ルビーも「コーダ」である。こちらネタバレになるので、その後のあらすじは省略することにして、この作品のクライマックス、音楽大学の実技試験の場面でルビーが歌う「Both Sides, Now」(邦題「青春の光と影」)の歌詞を紹介する。

Both Sides, Now (Written By Joni Mitchell)

Rows and flows of angel hair
And ice cream castles in the air
And feather canyons everywhere
I've looked at clouds that way

流れるように美しい天使の髪や
アイスクリームのお城がフワフワと浮かんでいて
羽毛に覆われたような谷がどこまでも続いている
わたしは、そんな風に雲を見ていた

But now they only block the sun
They rain and they snow on everyone
So many things I would have done
But clouds got in my way

だけど、雲は太陽を遮り
人々に雨や雪を降らせ
わたしがやろうと思っていたたくさんのことも
雲によって閉ざされた

I've looked at clouds from both sides now
From up and down, and still somehow
It's cloud illusions I recall

I really don't know clouds at all
わたしは今、その両側から雲を眺めてみる
上から見たり、下から見たり、でもどういうわけか
それは幻の雲の記憶で
わたしには雲のことは何もわからない

…… (<https://nikkidoku.exblog.jp/19751284/>)

3人の試験官以外誰もいない試験会場のホールの2階席にろう者の両親と兄が紛れ込み、その姿を認めたルビーは手話の〈声〉でこの歌を彼らに届ける。

この「手話うた」の場面と並ぶ、映画のもう一つのクライマックスは、高校の音楽祭でルビーの歌声に他の観客が聞き惚れ、大歓声を挙げる様子を目にした父親がその夜、同じ歌をもう一度自分のために歌ってほ

しいとルビーに頼み、彼女の喉に両手を当てて〈声〉を聞こうとする「身体うた」の場面だろう。〈声〉は決して口から耳へと届けられるだけのものではない。身体を使って、身体を通して、身体から身体へと届けられるものだ。そう実感できる場面である。

「コーダの世界」

「Both Sides, Now」は、当時まだ20代半ばのジョニ・ミッチェルが作詞作曲し1967年に発表して大ヒットさせた楽曲で、雲の見え方や感じ方が、これを見る角度や状況によって違ってくるように、あらゆる物事には内と外、表と裏、光と影があり、その両側 (both sides) を見ることや、今自分が見えている世界の向う側に、もう一つ別の世界があるかもしれないと想像することの大切さを歌ったと解釈される。

この歌が映画の主題歌として使われたのは何故かと考えてみると、先ほど述べたように、〈声〉には「口から耳へと届けられるもの」という側面だけでなく、「身体から身体へと届けられるもの」という側面もあるということを伝えるためではないだろうか。そしてまた、前者が主に聞こえる人 (聴者) の世界における〈声〉、後者が主に聞こえない人 (ろう者) の世界における〈声〉であるなら、コーダはその両側に気づいている、2つの世界をつなぐ存在であるというメッセージが込められているようにも思われる。

澁谷智子『コーダの世界 手話の文化と声の文化』(医学書院2009)は文字通り「コーダの世界」を知るための恰好の入門書である。

「コーダ」という言葉が最初につくられたのは1983年のアメリカだ。聞こえない両親を持つアメリカ人コーダがつくったニュースレターをきっかけに、英語圏でコーダの集まりがどんどん開かれるようになっていった。

日本では、「コーダ」の言葉は、1995年前後、「ろう文化」思想と一緒に紹介された。そのため「コーダ」は、「手話が堪能」で「ろう文化」を受け継いでいるとい

う、バイリンガルなイメージが強くアピールされた。……

ただ結論から先に言えば、「コーダ」かどうかという基準は、あくまでも「聞こえない親を持つ」ということだけにあり、手話が得意かどうかは関係ない。……どうやら、厳密な定義よりも大事なのは、「コーダ」としての経験とつながりであるらしい。お互いに、聞こえない親を持つゆえの気持ちが響き合えば、難聴の親のケースだろうが育ての親のケースだろうが、「コーダ」ということになるようだ(同書 23-24)。

以上の定義を踏まえて、「ろう文化」と「聴文化」の両方の世界を体験するコーダたちの「カルチャーショック」が具体的に紹介され、分析される。そのことは、澁谷の言う通り、「ろう者の世界で想定される行動様式と聴者の世界で想定される行動様式がどう違うのかを知る貴重な手がかり」となり、また「手話話者の感覚のなかにある『ろう文化』の中身を、日本語という言葉で記述していく作業を通して、聞こえる多数派が普段見過ごしている『聴文化』の姿形も、よりくっきりと見えてくる」(28)と思われる。

コーダのカルチャーショック その1

無意識のうちに「ろう文化」の規範を身に付けているコーダは、職場や学校などで感覚の違いに戸惑うことがあるという。一例を挙げよう(32-33)。

市役所勤務のあるコーダ女性は、かなり長い年月、トイレに行く時に「トイレ行ってきます」と断って出たため、職場の人に、最初は変わった子だなあと思われていた。「会議に行く」とは言うけど、「トイレに行く」とは言わないと、後で知った。

一方、彼女の方でも、「なんでみんな言わないんだろう? 言ってくれないと、訊かれたときに説明できないじゃない」と思っていた。そして、誰かがいないときに「〇〇さんは?」と尋ねられると、「あ、たぶんトイレ行ってます」と答えていた。やはり後になって、職場の人に、そういうときは「普通は『席をはずしています』と言う」と言われ、そういう違いがある

ことに気づいたそうだ。

このエピソードから著者の澁谷は、「察すること」や「暗黙の了解」を重視する「聴文化」と、曖昧な部分をなくし透明度を高くしておくことが高い価値を持つ「ろう文化」という、それぞれの特徴を引き出す。「ろう文化」では、わからないこと、知りたいこと、確認したいことがあったら、すぐに訊いてかまわない。他人の話を途中で止めてはいけないのではないかと過度に気を遣わなくてもよい。そして、訊けば明快な答えが返ってくる。そういう文化である。

その上で澁谷は、「察すること」や「暗黙の了解」を前提とした音声日本語のコミュニケーションは、ろう者やコーダだけでなく、外国人などにとってもわかりにくいものなのではないかと指摘する。

コーダのカルチャーショック その2

もう一つの例(40-42)。コーダと聴者では、同じように街を歩いていても、見えているものが違うし、気になるものも違う。エレベーターに乗る時、「普通の人には、エレベーターの中でドアの上の数字を見ているじゃないですか。でも私は、エレベーターに乗っている人がこっちを見ていなかったら、頭のてっぺんから爪先まで、なめまわすように見たくなる」。

また、聴者の夫と電車に乗っている時、その車両に風変わりな人がいて、その人から目が離せなくなり、夫から「見るな、見るな」と小声で合図されたという別のコーダ女性は、「聞こえる人は、「何かおかしいな」って思ったら、目をそらす。でも、私は、「何かおかしいな」って思ったら、目がついてしまう。なんで見なくていいの? って思う」と説明する。

聴者も本当のところは違和感のあるものを見た時に、それを心ゆくまで眺めたいという思いは持っている。だが、見る対象が人だったり、他人の持ち物や空間であったりする場合、エチケットとしてその思いを抑制し無関心を装う「儀礼的無関心」が作用する。「聴者の場合には、見ていることを見られる恐れが、ろう者やコーダよりも強くあるのかもしれない」(42)。

架け橋としての生きづらさ

ろう文化と聴文化、ろう者の世界と聴者の世界、これら二つの文化、二つの世界を知っているということは、ただちにコーダが両方の間を上手に行き来できることを意味するわけではない。むしろ、外国人と日本人との間に生まれた子どもや、在日外国人の子ども、帰国子女（帰国生）にも共通するように、二つの世界のどちらにも馴染めず、違和感を覚え、生きづらさを抱えながら日々を過ごすことの方が多く、また「コーダならではの世界」も持っている。

例えば、「大人じみた子ども」がコーダには多いと言われるが、そうなる要因として、幼い時からろう者の親の通訳をさせられることや、親が聞こえないことを理由に周囲の大人から「大変ね」「かわいそう」「がんばるのよ」と言われること、ろう者の経済的不利さや不安定さについて早い時期から気づかされることなどがある。そして、「いい子」であることを周囲から期待され、また自分自身でも努力し、さらにそれに対する反発も強くなる十代、特に思春期のコーダたちは「混乱とイライラのなかにある」（223）という。

こうした思春期のコーダも共感できる、年齢の近いコーダ同士が集まりつながる場が、近年生まれつつあると澁谷は言う。「コーダ同士のつながりが何かの形を生み出していく機運は十分に高まっている。その意味で、コーダパワーの今後にぜひ期待したい」（226）。

『ろうの両親から生まれたぼくが聴こえる世界と聴こえない世界を行き来して考えた30のこと』

1983年宮城県生まれのコーダ・五十嵐大が著したこのエッセイ（幻冬舎2021）は、自身の生い立ちから今日までの、「聴こえない母と聴こえるぼくとの人生」を綴ったもの。

20歳の時のこと。成人式に着るスーツを買いに、母親と仙台まで出かけ、買い物を済ませてイタリアンレストランで食食をとり、小一時間手話でおしゃべりをして、それから電車に乗って約30分、仙台から最寄り駅まで手話で話し続ける。電車を降りた瞬間、母

親が立ち止まり、「ありがとうね」と手を動かす。「なにが？」と訊くと、母親は次のように手話で語った。

——電車のなかで、大勢の人たちが見ている前で、手話を使って話してくれて、本当にうれしかった。今日はとても楽しかったの。だから、ありがとうね。

そして母は、さっさと歩きだしていった。でも、ぼくはその後ろ姿を追いかけられなかった。ぼくは駅のホームに突っ立ったまま、号泣した。周りの人たちが不審そうにぼくを振り返る。そんなことを気にする余裕もなく、ひたすらに泣いた。……

手話を使うことも母の耳が聴こえないことも、ずっと恥ずかしいと思っていた。だから、ぼくは手話を使わなくなり、母と外出もしなくなった。それが彼女をこんなに追い詰めていたなんて、想像もしなかった。でも、母はそのことでぼくを責めたりしなかった。むしろ、こうやって「ありがとう」と頭を下げるのだ。その気持ちを思うと、涙が止まらない（107-108）。

コーダが問いかける〈声〉とは何か

本書の末尾近くに、聴こえない親を持つ聴こえる子どもの会「J-CODA」の会長・中津真美の言葉が紹介されている。「コーダは揺れるものなんです。親を否定する気持ちと、それでも支えたいと肯定する気持ち。どっちもあっていいんですよ」（195）。

日本国内には2万2千人のコーダが存在すると推定されるそうだ（138）。コーダが主人公の丸山正樹のミステリー『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』（文春文庫2015）、韓国のイギル・ボラのエッセイ『きらめく拍手の音 手で話す人々とともに生きる』（矢澤浩子訳、リトルモア2020）もおススメの本である。

この機会に、ろう者の世界と聴者の世界の狭間に生まれ育ち、二つの世界の架け橋として生きるコーダたちのことを知ってほしい。それはきっと、うたやかたりにとって必要不可欠のツールである〈声〉とは何かを問い直す手がかりを与えてくれるはずだから。